

盂蘭盆についての一考察

—— 民俗学的見地から ——

井原 木 憲 紹

- 一、はじめに
- 二、盆行事の諸形態
- 三、盂蘭盆の儀礼構造の推移
- 四、おわりに

一、はじめに

日本の仏教行事の一つとして広く一般に定着しているものに盆行事がある。盆行事は新旧や月遅れ等、行なわれる日は各地によって異なるが、祖先の霊を迎え祭る意味では全国共通している。

この行事は広く仏教行事と解釈され、『仏説盂蘭盆経』所説の「目連救母説話」と「衆僧供養」の行事であるときれ、鎌倉時代、宗祖日蓮聖人も『盂蘭盆御書』^① 『四条金吾殿御書』^② 『四条金吾殿御返事』^③ にこれらを引いて説かれている。

しかし、現在各地で盆行事の習慣として行なわれているものは、単に仏教的立場からだけでは十分に説明できない

のである。

そこで、この行事を通して、仏教が日本古来の信仰形態を含み込んで、日本的盆行事という文化形態を完成させていったと考えられる。以下に盆行事の諸形態と儀礼構造の推移を通して考えたい。

二、盆行事の諸形態

現在行なわれている盆行事の始まりは、各地によって様々であるが、七月一日とする地方が多い。七月一日を関東から信州地方にかけて「カマブタツイタチ」「オカマノクチアケ」とか、静岡では「トンボツイタチ」などと呼ぶ^④。これらの地方を中心に地獄の釜の開く日ともいわれ、高い竿竹を利用して高灯籠を立てる家も多い。関西では、月遅れであるが、八月一日に兵庫県淡路島では、先亡者の戒名を書いた「マネキバタ」とか「ミズバタ」と呼ぶ布を先端につけた「トウロウギ」を立て、その下に提灯を吊り下げる。またこの日を「ボンミチツクリ」「カリミチツクリ」「ツイタチミチ」「ミチカリ」「ミチナギ」と呼ぶ地方が、静岡や茨城、宮崎など各地に見られ、墓の草取り、路の草取りが行なわれる。特に静岡の三河・遠江を中心に「カリミチツクリ」と言い、墓地の草取りだけでなく、村境から山の頂までの路の草を露のかからぬ程に刈る^⑤。これは、東北地方の氏神祭の時に行なわれることと同様の行事で、祖霊降臨の道作りと見られる。先祖の霊は墓地にいたのでなく、「アマ」と呼ぶ遠く高い世界にあるとの考えである。東北地方で見られる三十三年を経た霊は氏神と一体となると考え、「タオシバカ」といって墓石を片付け、位牌も仏壇から取り去って焼き、氏神棚の先祖と合祀する習慣がこれを裏付けている。高灯籠を立て、盆道をつくり、また幡を立てるのも先祖霊を招く手段である。

七月一日以前を盆始めとする地方もある。和歌山では「タカバナ」を立てる卯月八日を地獄の釜の開く日と伝え

盂蘭盆についての一考察

る。^⑧ 卯月八日は釈尊の生誕を祝する日であるが、その意味とは違った祖霊祭りや田の神祭りの要素が混同されたことに起因すると考えられる。長崎では、旧盆の六月十五日を「盆踊リノスガタメ」といい、踊り手の役割を決める日^⑨で、この日を盆始めとした。高知や愛媛では六月三十日の夜を「トボシハジメ」といい、新仏のある家では灯笼に火を入れ、精進料理で親戚を招き、七月三十日の「トボシアゲ」まで火を絶やさない^⑩。ちなみに、新仏のある家では長期間祭る例もある。茨城では高灯笼は一日から三十日まで、岩手では十三日から二十日まで杉の木を軒先に立て、徳島では、旧盆一日から三十日まで軒先に盆灯笼を吊るし、三年経つと川に流した^⑪。

次に七月七日を盆行事の始まりとする地方も多い。関西では月遅れであるが「ナヌカビ」「ナヌカボン」と呼び、道普請や川・溝掃除、井戸替え、仏具磨き、墓掃除、盆花迎え、盆灯笼の紙張りなどが始まる^⑫。この日は、全国的に七夕行事が中心になるが、七夕に関する伝承の牽牛、織女の伝説は、中国の星祭りの乞巧奠から出たもので、現在行なわれている笹竹を立てることは結びつかない。『公事根源』によると七夕は日本では天平勝宝七年（七五五）に始まった星祭り^⑬で、七月七日に行なわれたことから、笹竹を立てることは盆の習慣と混同されたと考えられる。兵庫では、この日を「タナバタダナ」と呼ぶ所もあり、軒下に棚をつくり供え物^⑭をすることから、祖霊祭りが起源になっていることがうかがえ、立てる笹竹が祖霊の依り代と考えられる。つまり棚の幡で、「タナバタ」と呼ばれることになったともいう^⑮。

また七夕に関して、東北地方から関東地方にかけてある「七回水を浴び、七回親を拝む」「七回水を浴び、七回赤飯を食べる」という伝承や、兵庫の「女子は髪を洗う」「人形を川や海に流す」「井戸替えをする」「七夕の竹を流す」等の伝承から、日本古来の禊や祓えの思想が根本にあったと考えられ、七夕行事が、「夏越しの祓」と同様の祖霊祭りの為の物忌みであったと考えられる。東北地方の「ネプタ」「ネプタ」「ネムリナガシ」もこれと同様の行事

であった。

このように、各地の盆始めの行事は、その多くが高灯籠や、幡、あるいは笹竹などを立てることであったり、盆路をつくることであったりし、祖霊を迎える準備として各地で様々なことが行なわれている。

七日盆をすぎると「盆花迎え」が行なわれる。十一日から十三日にかけて各地で見られ、正月の「若木迎え」に対応できるもので祖霊が花と共に家に帰ってくると思える地方も多く、兵庫でも櫓を山から持ち帰り、その帰り道は、背に担う格好で家に戻ったり、風呂に入れたり、足洗いの水を置いたりする。あるいは夜は戸を少し開いておく地方もあり、先祖を迎え入れる意味では共通している。

十三日は「迎え盆」と呼ぶ。全国的にこのように呼んでいる。夕方に墓に参り、菓や芋殻を焚いて祖霊（先祖）を迎える。提灯に火を入れ、墓から家まで案内したり、家の門口で芋殻を焚き祖霊を迎えた。仏壇の前にショウロゴザを敷いたり、正月の「歳棚」の様に「ショロダナ・ボンダナ」^⑭を設け、先祖の位牌を置き供物をする。この日は、赤飯を炊く地方があったり、兵庫の様に「オチツキ団子」^⑮供え、関東では「迎え団子」^⑯を供えてめでたいこととした。これら迎えられた祖霊は精霊と呼ばれる。ナスやキュウリに芋殻で足をつけて、精霊の乗物に似せた牛・馬を作り、棚まで芋殻で作ったハシゴを掛け、ナス、キュウリをサイコロ状に刻み、洗米を入れた水鉢に盛り、供物とした。これを「水ノ子」「水ノ実」と呼び、ミズハギやタムラソウなどを束ねたもので水向して拜む^⑰。

ところが、祖霊とは別に、「無縁さん」とか「餓鬼」を別に棚を設けて祭ることが広く行なわれている。この棚は「ミズダナ」「アラダナ」「ソクシヨダナ」「タマダナ」「ムエンダナ」等と各地で呼ばれ、仏壇の脇、縁側、庭先などにしつらえる^⑱。供物は、先祖の精霊は器に供えるが、ここでは柿の葉などを使う。また新仏である新精霊をこの「アラダナ」や「ミズダナ」で祭る地方もあり、兵庫県淡路島などがその例である^⑲。死後、年を経ない霊は崇るとか、祖

靈と共になれないとする考えから出ている。この「ミズダナ」では、新精靈と、帰るべき所のない靈や行き倒れ、突然の不幸で死亡した者や未婚の者で祭ってくれる子供のない靈を祭る。それはこの世の人々への禍いを防ぐためと考えられており、この「無縁さん」あるいは「餓鬼」が仏教の餓鬼という恐ろしい存在と関連され、施餓鬼会とつながったと考えられる。

これらの盆の帰りに来る靈は、先祖の靈と新仏の靈と無縁仏の三種の靈で、各々祭る方法に相異が見られるのである。^③

盆の供物についても『延喜式』三十三に名称があげられ、この内容から、盆会の性格を收穫祭的傾向を持つものとして平安時代に位置づけたと見る説もあり、なかでも盆を稻作に立脚した祭祀と見る説と、麦作の收穫祭ととらえる見解とがあり、^④ 仏教の見地からのみでは盆を理解しえない面もある。

次に盆が先祖の靈を迎えるのめでの祭りであったことは、親戚が互いに「盆礼」といい、米やそうめん、小麦粉等を贈答し、酒宴をもち、「よいお盆で……」と挨拶をかわしたことからもうかがえ、「盆礼」を行う十三日を長野では「ボンゼック」「ポンドシ」「ボンセイボ」と呼んでいる。関東では両親の健在の者は盆中に魚を取って両親に食べさせたり、奈良では親の健在の者は盆中にサバを食べることを「イキミタマ」といったり、盆礼を「イキミタマ」「イキボン」と呼ぶ地方も多く、盆礼が死者の靈でなく、生存する親などの「イキミタマ」に感謝し、祭る意味があったと考えられる。^⑤

江戸時代、江戸城でも女中の御目見得以上の者は、親が健在ならば盆には目録や、料理が下されたといわれる。^⑥ また中国の道教思想の「中元」が七月十五日であったことから日本で行なわれていた盆行事と習合し、盆礼を中元と呼ぶこととなったと考えられる。

十三日夕方から各家に迎えられていた精霊は、十五日か、十六日に送り火を焚いて盆の供物や送り団子、赤飯のにぎり飯をみやげに送り帰される。「灯笼ながし」「精霊送り」「精霊ながし」と各地で呼ばれる行事で舟や、シヨゴゴザに巻いて海や川に流す。初盆の家では特に念入りに「シヨロブネ」をつくる。二十日や、二十四日、三十日を「終い盆」「送り盆」とする地方も多く、七月を盆行事で終始するのもめずらしくない^⑧。

以上の様な盆行事は、正月行事と通ずる所が多く見られる。比較すると、盆花迎えと門松迎え、盆棚と歳棚、盆札と年玉、送り火とトンドなど、正月行事とほとんどが符節を合せている。一年の半分ごとと盆・正の二大行事があり、一年を二期に分ける日本古来の文化形態が伝えられたと考えられる。年の暮にも魂祭り(祖霊祭)があったことは『徒然草』第十九段にも記されており、正月も祖霊祭を中心としたものであったことがうかがえる。盆行事が仏教との結合において祖先崇拜をより決定的なものとし、日本古来の祖霊祭りが仏教的意義付けをもって今日に伝わった文化形態と言える。

三、盂蘭盆の儀礼構造の推移

日本において盂蘭盆会や、それと併修されることの多い施餓鬼会が、いつ頃から行なわれて来たか、また日本古来の信仰形態とどの様に結びついたのであろうか。

盂蘭盆会の由来は、西晋の竺法護訳の『仏説盂蘭盆経』と『仏説報恩奉盆経』が典拠となって始められた行事で、「盂蘭盆」とは、Ullambana (烏藍婆拏)の音写で「倒懸」と訳し、供養を受けられず逆さ吊りの責苦にあう苦しさを言い、この先亡の霊を救済するのが盂蘭盆会という法会であると説明される^⑨。

しかし『仏説盂蘭盆経』はインドの目連救母の伝説に中国の思想が合さって中国で成立した偽経であるとの説もあ

孟蘭盆についての一考察

り、また、孟蘭盆の倒懸の意義については、唐の玄奘の『一切経音義』が典拠になっているが、この書は、外書を引いて子孫のない餓鬼は倒懸の苦を受けるとあるが、目連には子供があることから孟蘭盆経には倒懸を意味する語はなく、孟蘭盆を「器物」と見ていた唐代の見方への否定として倒懸をこじつけたと考える説もある。ちなみに、盆を「器物」と見るのは日本にもあり、盆を精霊に供物する器の「ボニ」「ボン」から出た日本語で、仏教のウランバナが合さったとする仮説もある。^⑤

次に、中国で孟蘭盆が行なわれた七月十五日は中元にあたる。中元は畑作の収穫祭である道教の三官信仰の祭祀で、これが祖先祭と結合し、さらに仏教の自恣の日が同日であったことから、これとも結合し、今日伝わる様な孟蘭盆会の原型が完成したと考えられている。^⑥

孟蘭盆行事の初見は、中国において梁の武帝の大同四年（五三八）に同泰寺で行なわれたとあり、その後唐代に盛んに行なわれた。^⑦ 日本で、孟蘭盆会が行なわれたのは『日本書紀（第二十二）』の推古天皇十四年（六〇六）に「寺毎ニ、四月八日、七月十五日ニ設齋セシメキ」とあるのが初見で、『同書（第二十六）』の齋明天皇三年（六五六）には「辛丑（十五日）須弥山ノ像ヲ飛鳥ノ寺ノ西ニ作り、マタ孟蘭盆ノ会ヲ設ケキ」とあり、同五年（六六一）には「庚寅ノ日（十五日）群臣ニ詔シテ、京内ノ諸寺ニ孟蘭盆経ヲ勧講キテ七世ノ父母ニ報イシメタマヒキ」と記されてはやくから行なわれていたことがわかる。

平安時代に入ると宮中や大寺を中心に貴族層で広く行なわれたことが、『枕草子』『御堂閔白記』『小右記』『蜻蛉日記』などを通して知られ、平安末期から鎌倉時代にかけて、次第に民衆に広まり、民衆の中に存在した祖霊信仰と結びついていったと考えられる。『吾妻鏡』（第六）の文治二年（一一八六）七月十五日の条に、万灯会が行なわれた様子が見られ、『明月記』の寛喜二年（一二三〇）七月十四日の条には、近年民家では今夜は長竿の先に灯籠の

様なものを付けて先祖供養をしていることを伝えている。宗祖日蓮聖人の御遺文にも、文永八年（一二七一）の『四条金吾殿御書』^⑧、弘安三年（一二八〇）の『四条金吾殿御返事』^⑨、同年の『孟蘭盆御書』^⑩に孟蘭盆の記事があり、特に『孟蘭盆御書』は信徒の心構えを『孟蘭盆経』を典拠として説かれ、法華経で七世の父母を供養することの功德を説かれていることから、当時の民衆の中にこの行事が広まり、定着していた様子がうかがえる。

鎌倉時代を経て室町時代に入ると、民衆の農耕儀礼として行なわれていた祖霊祭りが仏教の盆と結合し、年中行事として定着したと考えられる。『看聞御記』応永二十三年（一四一六）七月十五日には、孟蘭盆に念仏踊が行なわれたことが記され、同じ日「施餓鬼」が行なわれたとも伝えている。また、『満濟准后日記』の永享五年（一四三三）七月十五日には、三代の聖霊と八大祖師以下の列祖、法界衆生のために各々三度ずつ水を蓮葉の上に灑き上げたと伝え、施餓鬼が孟蘭盆会に併修されたことが明白となっている。

次に施餓鬼の起源は、空海が大同元年（八〇六）に日本に伝えた『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼神呪経』（不空訳）所説の阿難と焰口餓鬼の故事、および阿難の布施行とである。孟蘭盆において、經典所説の衆僧供養の面が伝承されにくかったのは、中国では鬼と称されるものには亡者の霊や悪鬼、妖怪変化、水鬼などが含まれており、これらの悪鬼に、水上や陸上から供物を投げて災いをしずめる施餓鬼法、あるいは水陸会が行なわれており、これと孟蘭盆会が施す意味において結合し日本に伝えられたからと考えられる。

施餓鬼は空海が經典を伝えた平安時代から行なわれたようである。安然の『八家秘録』巻下に記され、石山淳祐の『要尊道場観』巻下には次第が記されている。鎌倉時代に入って、宗祖日蓮聖人の『四条金吾殿御書』^⑪に孟蘭盆に関する事柄に引きつづいて『法華経・授記品』の「如従飢国来」以下の経文を引き、餓鬼供養を述べられていることから、孟蘭盆会と餓鬼供養が結びついて来たことをうかがえる。日本においてこれが結合しやすかったのは、祖霊信仰

孟蘭盆についての一考察

に見られる災い除け、祟り除けの觀念と同質のことであつたからと言へる。圭室諦成は、施餓鬼は、中世以降の戦亂の勝者よつて行なわれた大施餓鬼会や、供養碑の思想的背景となつてゐるとし、これは怨親平等の精神でなく、亡靈の祟りを封ずる呪術的側面のあることを指摘している。^⑥ またこれらの祟りは農耕への災いという觀念から出發してゐると考えることも可能であらう。

四、おわりに

現在、広く盆行事で見られる形態は、「シヨロダナ」や「アラダナ」を設けて、祖靈と新仏、それに無縁さん（餓鬼）の三種の靈を祭ることである。これに仏教的意味づけをすれば、先祖への供養と、施餓鬼の菩薩行を通して、現世利益を期待できるのであり、餓鬼を祭ることでは災いをのがれるという考えは、民衆の間に孟蘭盆が施餓鬼と一体となつて伝承されて来たことを裏付けてゐる。施餓鬼を行つて餓鬼に墮した者を救済することは、惡靈となつて崇める原因を除き、農耕上の豊作を祈念することにも通じたと考えられ、施餓鬼やシヨロダナの水向供養などが、水を欲する農耕上の祈りへも通じてゐると言へよう。

以上のように、孟蘭盆・施餓鬼という仏教の説話や思想が、日本古来の祖靈祭、厄除け、災い除けの儀礼と結合し、それに中国の中元思想も加わり、今日の様な盆行事として定着したのである。室町時代から江戸時代を経て、仏教的解釈や法要が占める部分が拡大するにつれて、民衆には仏事と解釈されるようになった。各寺院に行なわれる孟蘭盆施餓鬼法要も、祖先、新仏、法界万靈への追善供養法要となり、孟蘭盆会の衆僧供養の原義が見失なわれ、日本固有の文化形態を習合した日本的仏教行事となつたのである。

〔註〕

- ① 『昭和定本日蓮聖人遺文』第二卷 一七七―一頁。
- ② 同書、第一卷 四九三頁。
- ③ 同書、第二卷 一七九―九頁。
- ④ 柳田國男『歳時習俗語彙』（昭和五〇年、国書刊行会）四四九―四五〇頁。
- ⑤ 和歌森太郎『淡路島の民俗』（昭和三十九年、吉川弘文館）二〇九頁。
- ⑥ 柳田國男『歳時習俗語彙』（昭和五〇年、国書刊行会）四五〇―四五二頁。
- ⑦ 橋浦泰雄『月ごとの祭』（昭和四十一年、岩崎美術社）。
- ⑧ 柳田國男『歳時習俗語彙』（昭和五〇年、国書刊行会）四一七頁。
- ⑨ 文化庁編『日本民俗地図』第一集（昭和四十四年、国土地理協会）。
- ⑩ 同書。
- ⑪ 同書。
- ⑫ 神戸新聞社『兵庫県探検・民俗編』（昭和四〇年、神戸新聞社）二二三―二三四頁。
- ⑬ 同書、二二〇―二二二頁。
- ⑭ 五来重『続仏教と民俗』（昭和五十四年、角川書店）二三四頁。
- ⑮ 神戸新聞『兵庫探検・民俗編』（昭和四〇年、神戸新聞社）。
- ⑯ 同書。
- ⑰ 柳田國男『歳時習俗語彙』（昭和五〇年、国書刊行会）四八三頁。
- ⑱ 神戸新聞社『兵庫探検・民俗編』（昭和四〇年、神戸新聞社）。
- ⑲ 同書、二二七頁。
- ⑳ 柳田國男『歳時習俗語彙』（昭和五〇年、国書刊行会）五〇四―五〇九頁。
- ㉑ 神戸新聞社『兵庫探検・民俗編』（昭和五〇年、国書刊行会）。
- ㉒ 五来重『続仏教と民俗』（昭和五十四年、角川書店）二〇八―二一〇頁。
- ㉓ 藤井正雄『無縁仏考』（『日本民俗学』七四、昭和四十六年）。
- ㉔ 藤井正雄『孟蘭盆と民俗』（『講座日本の民俗教』2、昭和五十五年、弘文堂）。
- ㉕ 神戸新聞社『兵庫探検民俗編』（昭和四〇年、神戸新聞社）二二五頁。
- ㉖ 橋浦泰雄『月ごとの祭』（昭和四十一年、岩崎美術社）。
- ㉗ 西角井正慶編『年中行事辞典』（昭和三十三年、東京堂出版）。

孟蘭盆についての考察

孟蘭盆についての一考察

- 29 橋浦泰雄『月ごとの祭』（昭和四十一年、岩崎美術社）。
30 『望月仏教大辞典』第一卷 二四五頁。
31 藤井正雄「孟蘭盆と民俗」『講座日本の民族宗教』2 昭和五十五年、弘文堂。
32 岩本裕『月連伝説と孟蘭盆』（昭和十三年、法蔵館）。
33 柳田國男「盆とほかひ」『筑摩双書先祖の話』昭和五十年、筑摩房。
34 岩本裕『目連伝説と孟蘭盆』（昭和四十三年、法蔵館）二二五頁～二四五頁。
35 『望月仏教大辞典』第一卷 二四五頁。
36 藤井正雄「孟蘭盆と民俗」『講座日本の民俗宗教』2 昭和五十五年、弘文堂。
37 同書。
38 註②参照。
39 註③参照。
40 註①参照。
41 『統郡書類従』（看聞御記、二十九頁）。
42 同書（満濟准后日記、四八五頁）。
43 藤井正雄「孟蘭盆と民俗」『講座日本の民俗宗教』2 昭和五十五年、弘文堂。
44 沢田瑞穂『地獄変・中国の冥界説』（昭和四十三年、法蔵館）一三四～五頁。
45 藤井正雄「孟蘭盆と民俗」『講座日本の民俗宗教』2 昭和五十五年、弘文堂。
46 註②参照。
47 圭室諦成『葬式仏教』（昭和三十九年、大法輪閣）。